

「近代部門」

◆第一会場 0807教室 一〇時半開始

明治中期における「雑種児」表象とその言説的背景

——半井桃水『胡砂吹く風』・広津柳浪『異り種』を中心に——

ブラッドリー・桜ミシェル

本発表は、半井桃水『胡砂吹く風』(明治二四〜二五年)・広津柳浪『異(かわ)り種』(明治二七年)の二つの文学テキストを対象とし、同時代の「雑婚」および「雑種児(あひのこ/mixed race)」論をめぐる言説を検討するものである。『胡砂吹く風』は朝鮮人と日本人との混血児・林正元が日朝関係の構築のために奔走する政治小説の性格を持つ。一方『異り種』では日英混血児・お英の苦悩と転落が語られる。

明治二〇〜三〇年代には、高橋義雄『日本人種改良論』(明治一七年)を嚆矢とし、「雑婚」や「雑種児」をめぐる議論が社会学・衛生学等の領域で活発化した。これらは日本人の男女をより「優れた」臣民へと「改良」しようとする言説や、国内の外国人の流動性に関する是非を問ういわゆる「内地雑居論」とも結びついた。

こうした言説状況のもとで「雑種児」表象が国家的統合と排除の双方に関わる装置として機能していたことを明らかにする。

(名古屋大学大学院)

岡田八千代『新緑』論

大串 雛子

岡田八千代(当時小山内八千代)の『新緑』(上巻・明治三九年、下巻・明治四〇年刊)は、当時若手で売り出

し中であつた俳優・井上正夫をモデルとした小説である。明治期を代表する名優たちが没した後の歌舞伎界を圧倒して新派が隆盛の時代を迎えていた当時、伊井蓉峰が座長をつとめる真砂座に取材し小説を書くのは、新派を対象にする劇評家の少なかった明治39年から新派の劇評を書き、その実態を熟知していた八千代であるからこそ可能であつたと言える。

舞台上と観客との間に一定の知識の共有がある歌舞伎に比べて、新しい形式を模索していた新派に対する八千代の劇評はより詳細かつ具体的と評される。演劇に対する文章を発表することは、視覚・聴覚といった非言語の効果が必要である演劇を言語に変換し表現することだが、劇評でその経験を積んだ八千代は、それをどのようにフィクションである小説に応用しようと試みているのか検討を行う。

(明治大学大学院)

長田幹彦〈旅役者もの〉の素材

浅井 航洋

長田幹彦は明治末期に『濤』と『零落』という旅役者を題材とした作品によって文壇デビューを果たした。

『濤』と『零落』は文壇で高く評価され、現在でも幹彦の代表作とみなされている。これら〈旅役者もの〉は、幹彦が明治四四年に北海道で旅役者一座と交流した経験をもとにして書かれており、先行研究においても幹彦の実体験がかなり反映された作品として捉えられてきた。しかし、幹彦の北海道における足跡には不明瞭な点が多く、モデルとなった旅役者一座の実態や幹彦との具体的な関わりについては検討されていない。そこで本発表では、当時の北海道地方新聞の記事調査を通じて、幹彦が関わった旅役者一座の動向の一端を明らかにする。さらに、その

調査結果と旅役者に関する同時代言説を補助線として、作品における旅役者の描かれ方を検討する。これらの作業を通じて作品における虚実の構造を浮かび上がらせ、〈旅役者もの〉の新たな読解を試みたい。

(甲子園大学)

谷崎潤一郎「病蓐の幻想」論

——サウンド・スタディーズの視座から

木村 天使

本発表は、谷崎潤一郎の「病蓐の幻想」(一九一六・一一)における聴覚の様態を検討するものである。本作は神経衰弱と歯痛から幻聴と幻覚を患い、生じた耳鳴りから大地震の予兆である地鳴りを想起して怯える、〈彼〉の幻想を描いた物語である。谷崎はのちに「九月一日」前後のこと(一

九二七・一)で本作を取り上げて、「地震に対する恐怖と、それに基く幻想とを主にして取り扱ったもの」と言及している。それにより本作は、関東大震災の言説と結びつきながら議論されてきた。しかし本作を読み解けば、「地震に対する恐怖」から生まれる

「幻想」に先だって、歯痛や幻聴といった身体感覚が描写され、物語内の現実と虚構の結節点になっていることが窺われる。本作で試みられた内的な音の導入は、テクストで如何に機能しているのか。サウンド・スタディーズの視座から検討し、大正期における谷崎の文学表現の特質の一端を明らかにしてみたい。

(佛教大学大学院)

江戸川乱歩「二銭銅貨」論

——E・Aポーター「黄金虫」との翻案関係について——

狩野 仁

(龍谷大学大学院)

り手の自己懷疑として語られる知識人のエゴイズムについて分析する。

(神戸大学大学院)

「二銭銅貨」は「新青年」(一九二二・三・四)に掲載された乱歩のデビュー作である。本作とE・Aポールの「黄金虫」(一八四三・六)の関係についてはこれまで複数論じられてきた。例えば本作が、ポールの作品の要素を多分に含む模倣であるとするもの、「二銭銅貨」の獨創性を犯人探しが存在する探偵小説であると論じたものなどがある。

しかし、翻訳・翻案の観点についてはまだ研究の余地が見られる。

本発表では、両作品の比較研究を引き継ぎつつ、作中の「六連銭」、暗号解読において使用された「南無阿弥陀仏」、六点式点字などのこれまであまり言及されてこなかった要素に着目する。本作が「黄金虫」を下敷きとしながら、当時の日本において普及していた文化をいかに取り込んでいたのか、その翻案の様相を検証していきたい。

◆第二会場 0808 教室 一〇時半開始

金史良 「草深し」論

金 善泰

金史良 「草深し」(『文藝』一九四〇・七)は、日本帝国の植民地支配のもとで疲弊した朝鮮の人民を描くことを通して、金史良の民族主義が発現されていると論じられてきた。特に本作の主人公である朴仁植は、金史良の平壤普通高等学校時代の経験や、一九三五年『東亜日報』に掲載された紀行文によって人物造形されている。しかし本作の語り手は、一九四〇年の時点に立っており、一九三〇年代の自分を相対化する。本発表では、本作を語り手の経験が後述的に語られているテキストとして読み直す。これを通して、語

太宰治「恥」を中心に

——育てたい女たち

玉田 琴乃

まず、太宰治の女性独白体による複数の作品は、語り手が他者を支え、仕立て上げようとするものの、その期待や理想を裏切られていく物語構造を有すると指摘する。語り手である女性が他者を支援しようとすることは、その他者よりも優位に立とうとする無意識的な支配欲と一体である。語り手たちが物語ること、そのような欲望は相対化され、同時に、女性たちの過剰なケアが徒勞であることも暴かれる。これらは特に「燈籠」、「きりぎりす」、「恥」といった作品において明

瞭に読み取ることができ、本発表では、「恥」を中心に取り上げる。男性作家である「戸田」を育てあげようとした語り手「和子」の語りを丹念に読み、彼女の行動がストーリーカー心理学における行為の段階に重なる点などを踏まえつつ、その支援と欲望のありようを分析する。そして、「和子」の幻想が、他者である「戸田」との関係を現実に築こうとする中で崩壊する様を捉えていく。

(工学院大学非常勤／  
学習院大学大学院)

〈女学生〉を手がかりとして林芙美子の後期作品を読む

廖 秀娟

林芙美子は幼少期、母と養父に伴われて不安定な生活を送り、転校を繰り返したが、一九一六年に尾道へ定住し

てようやく安定した学生生活を得た。

恩師に文才を認められ尾道市立高等女学校へ進学し、国語教師の指導を受けて文学の道を志す契機を得た。在学期は〈新しい女〉の風潮が広がり、少女文学が繁栄した時代である。彼女の文学作品は、大正期のロマンティックな風格を備えると同時に、戦時下には戦鬨の鼓声を響かせ、さらに戦後には退廃と沈淪の様相をも映し出している。統計的分析により、戦前・戦後を通じて複数の作品に〈女学生〉が登場することが確認されるが、従来研究ではこの点への論究はほとんど見当たらない。本研究は後期作品を対象に〈女学生〉という役割設定の意義を明らかにし、新たな視点を導入することで開拓的なアプローチを試みる。

(元智大學)

『復興期の精神』のパラテキスト

——「抵抗の書」になるまで——

孫 ロカ

戦後文学を語るに避けては通れない花田清輝の『復興期の精神』（我観社、一九四六年）は、初版以降数回も版を重ねてきた。今の最新版である講談社文芸文庫版は、この著作を「戦時下執筆の比類なき抵抗の書」として宣伝しているように、大胆で難解なレトリックによって戦争に対する抵抗を表したエッセイ集として評価されることが多い。しかし、この際に用いられる「抵抗」の概念そのものに対する考察は、まだ不十分であると考えられる。同時代評には姿すら現さないこの語彙が、一九五〇年頃にレジスタンス文学の流行によって再発明され、二一世紀に入ってからは人文学研究のキーワードの一つとなった。本研究は、重版の度にテキストにつき加えられてきたパラテキスト（作者によるあとがき、評論家による解説、出版社の宣伝戦略な

ど)とそれぞれの時代における「抵抗」をめぐる言説状況を細かく分析し、この「抵抗の書」の形成過程を探っていきたい。

(早稲田大学大学院)

椎名麟三「永遠なる序章」論

祝 影紅

椎名麟三のはじめての長編小説「永遠なる序章」は、一九四八年に河出書房の長編書き下ろしシリーズとして刊行された。本作は、戦後の廢墟を生きる主人公・砂川安太が余命宣告されて死ぬまでの六日間、死の恐怖に震えながら生きる「パトス」をつかんでいく過程を描いたものである。同時代評では、デビュー作「深夜の酒宴」(一九四七)から受け継いだ極端な観念性が難点として指摘されているが、絶望から脱出し、生を見つめ直すとする点

から、椎名文学における重要な転換点として評価されてきた。題名をはじめ、本作では同じ記述や表現、モチーフの繰り返しが目立ち、反復のイメージが散見される。創作ノートでもキルケゴール「反復論」への言及が見られることから、本作は反復を方法的に導入していると考えられる。本発表では、創作ノートを手がかりに、反復という要素について検討しつつ、それがいかにパトスの発生につながるかを考察する。

(神戸大学大学院)

川端康成におけるモデルへの意識と「故園」

——モデルと作品との乖離を中心に

松井 啓一郎

川端康成は批評家として、モデル小説についてたびたび言及してきた作家

である。川端は、実在の人物をモデルとした作品を書くこと／読むことについて、完全な写実／読解が不可能なものとして見做している。一方で川端は、自身や周囲の人物をモデルとした作品を多く残しており、モデル小説の可能性に向き合ってきた作家ともいえる。中でも「故園」(『文藝』昭一八・五〇・一)は、小説の冒頭でモデル小説の可能性について述べるほか、語り手が「故園」執筆中の「作者」に言及するメタナラティブの手法が取り入れられており、川端のモデル小説に対する模索の一つといえるだろう。この観点から本発表では、「故園」前後における川端のモデル小説への言及を整理・分析したうえで、「故園」中での、モデル小説を書く／読む行為への言及が作品解釈に及ぼす影響や、モデル小説の可能性がいかに表象されているかについて明らかにしたい。

(青山学院大学大学院)

NHK『Snow Country』にみる川端康成  
『雪国』の再解釈

梁 蘊嫻

川端康成『雪国』は、これまでたびたび映像化されてきた。本発表では、

2022年にNHKが制作した『Snow Country』(演出:渡辺一貴)を取り上げる。

『雪国』は、島村と駒子の不倫の愛を描いた作品として解釈されることが多い。しかし、本発表で取り上げる『Snow Country』は、それとは異なる読みを提示している。この作品では、原作において曖昧に描かれている駒子・幸男・葉子の関係が、島村の視点を通して解きほぐされ、純愛の物語が浮かび上がってくる。川端康成特有の抒情的な描写や感性は、『Snow Country』においては理性

的な叙述へと置き換えられ、作品全体がサスペンス風に構成されている。本発表では、『Snow Country』の分析を通して、『雪国』の新たな解釈の可能性を示すとともに、映画アダプテーションの意義について考察したい。  
(元智大学)

### ◆第三会場 0809 教室 10時半開始

夷齋石川淳「花」論

——『諸花抛入指南聞書』と戦後草月流の広がり——

倉持 紗季

本発表で取り上げる石川淳の「花」は、一九五三年一月に「夷齋清言」の第五回として『文学界』に掲載された後、単行本『夷齋清言』(新潮社、一九五四・四)に収録された。単行本では、『草人木』における身分の区別を

論じた「ワビ」と、茶道とのつながりを踏まえて花道を論じる「花」が巻頭に配された。こうした掲載順序の変更には、戦後になって茶道や花道が日本の伝統的な文化として国内外から注目を集めたことを意識したものと考えられる。そこで本発表では、石川と親交のあった草月流家元・勅使河原蒼風が牽引した戦後の生け花界の様相と、「花」に見られる記述を照らし合わせ、石川が当時の生け花界をどのような視点で評価していたのかを明らかにする。また、「花」の冒頭で紹介される『諸花抛入指南聞書』に着目し、同時代の花道に関する学術的な動向とも照らし合わせ、従来の研究で等閑視されてきた石川の花道に対する眼差しを明らかにする。

(早稲田大学大学院)

安部公房とハインリヒ・フォン・クラ  
イスト

佐々木 幸喜

本発表では、安部公房の初期作品に  
対するハインリヒ・フォン・クライス  
トの影響を検討する。二〇二四年、  
「安部公房展・21世紀文学の基軸」  
が県立神奈川近代文学館で開かれた。  
生誕一〇〇年を記念して開かれたこの  
特別展で出品された資料群の一つに  
「安部公房 二〇代までの蔵書」があ  
る。安部の蔵書はこれまでほとんど明  
らかになっていないが、しかしなが  
ら、安部文学の成立過程を考える上  
で、材源を解明する調査は欠かせな  
い。最も基礎的な調査は、全集に収録  
された安部や周辺の人物の発言を辿る  
ことである。全集では、ドイツ語圏の  
作家、特にリルケあるいはカフカに関  
する言及が多く見られる(糸賀二〇  
二四)一方で、同じドイツ語圏作家で  
あるクライストに関する安部の発言は

確認できない。クライストの喜劇『壊  
れ甕』(一八〇八初演)が蔵書に含ま  
れていたことは重要な発見である。安  
部の処女戯曲「少女と魚」(一九五  
三)などへの影響関係を考えたい。

(京都大学)

味の薄れた趣味の使い方

——永井荷風「吾妻橋」を視座として

張 怡

永井荷風文学における橋は、その上  
から見える風景と結びつけられ、荷風  
の江戸趣味・文明批評的な態度を示す  
都市表象として注目されている。

都市を観察する拠点であると同時に  
に、橋は別の空間、場面に入る境目で  
もある。特に荷風が晩年にほぼ毎日市  
川から浅草に赴くことを踏まえると、  
吾妻橋は見逃せない通り道だと言え

る。しかも、荷風は木橋から鉄橋に改  
築された吾妻橋に不満を持っていたに  
もかわかわらず、晩年に「吾妻橋」とい  
う題名を掲げ、橋自体より道子という  
街娼を中心に据える作品を執筆してい  
る。ここからは、吾妻橋という場所  
が、街娼を描くことと如何なる関係を  
結んでいるのか、という問題が浮上す  
る。

以上を踏まえ、本発表は「吾妻橋」  
を視座にし、作中における吾妻橋の意  
味と機能を分析した上で、荷風にとっ  
て伝統趣味の魅力を失ったはずのもの  
を再び作品に取り込む行為が、荷風文  
学にとって如何なる意味を持っている  
のかを明らかにする。

(東北大学)

円地文子『なまみこ物語』における一  
條帝

——『うつほ物語』『源氏物語』との比較から——

増田 祐希

『なまみこ物語』(昭和三四〜四〇年)は、円地文子の代表作であり、多くの論者によって定子と帝との愛を中心に捉えた「純愛物語」と読まれてきた。そのため、定子が純愛物語にふさわしいヒロインとして描かれ、さらには『源氏物語』の桐壺更衣と類似していることが指摘されてきた。しかしながら、純愛物語の片翼を担うはずの一條帝についてはあまり論じられていない。そこで本発表では、定子の髪にくるまる場面における一條帝を『うつほ物語』の仲忠と、定子の葬送の場面における一條帝を『源氏物語』の桐壺帝と比較し、一條帝の人物像を考えていきたい。これにより、近代に書かれた純愛物語としての『なまみこ物語』が、一條帝をはじめとする愛する人の死に立ち合えなかったすべての者の魂

を救済する物語であることを明らかにする。

(愛知県立千種高等学校)

カフカと「書くこと」

——倉橋由美子初期小説再考

韓 雨彤

倉橋由美子はカフカを「文学的青春」と位置づけ、評論や創作を通じてカフカとの強い関係性を示し続けている。先行研究によりその受容は検討されてきたが、作家の言説への依拠が大きく、個々のテクストに即した考察は十分になされていない。

そこで本発表は、『婚約』『新潮』一九六〇年八月号)をはじめとする初期小説群全体を対象に、倉橋のカフカ受容を「書くこと」というモチーフの次元から再検討する。『婚約』は、カフカを≡として作中に「連行して行動

させてみたもの」であり「小説の形をとったカフカに対する批評」と自身が述べた作品である。テクストに織り込まれたカフカの断片が「書くこと」をめぐる主題といかに共鳴しているかを精査し、カフカ文学における「書くこと」の構造を倉橋がいかに読み替え、自らのテクストへと再組織化したのかを分析する。これにより、両者の創造的な対話関係を浮き彫りにする。

(名古屋大学大学院)

ポストリブのピル小説

三林 優樹

五〇年代後半に研究開発されたピル(経口避妊薬)は、その是非が様々な争点化されてきたが、七〇年代リブである中ピルの活動を経ることで、「産む」ことの自己決定権を追求するリブ Rodgers・ヘルス/ライツの問題

意識や意義が強調されてきた。ピルについては大庭みな子をはじめとして少なくない作家によって主題化されてきたが、その文学的意義については体系的にまとめられていない。本発表では、七〇年代末から八〇年代のポストリブ期に発表された見延典子や富岡多恵子のピルをめぐる作品を検討することで、ピル小説をリブ後の文学表現として文学史的に位置づけることを目的とする。分析では「産む」ことの自己決定とともに、避妊に関する男性主体の語りに注目し、男性の生殖責任の議論と接続させることで、再生産領域の再配置をめぐる政治を考察する。ピルを単なる文学上の一素材ではなく、再生産領域の言語表現として再考することを試みたい。

(早稲田大学大学院)

村上龍『だいじょうぶマイ・フレンド』における「非人間」的存在と生命の力学  
——ポストヒューマニズム的視座からの再読——

坂本 雛美

本発表は、これまでの研究では論じられることのなかったポストヒューマニズムの視座から、村上龍『だいじょうぶマイ・フレンド』(一九八三)を再読する試みである。同作は、飛べなくなったスーパーマンであるゴンジ・トロイメライと三人の青少年、そしてゴンジの細胞を狙う巨大企業「ドアーズ」との対決を描く。ゴンジは、見せ物、超人的英雄、実験動物として扱われることで、徹底的に「人間」から排除された存在として位置付けられる。対する科学企業「ドアーズ」は非暴力と博愛を歌いながら、生命を管理・操作し、世界を人間中心主義的に統制しようと志向する。本発表

では、こうした両者の対立構造に着目し、生命をめぐる権力と排除の力学を分析する。その上でゴンジの寄る辺なきから「他者」の声を読み取り、人間中心主義的な「人間」概念の再検討を試みる。

(青山学院大学大学院)

#### ◆第四会場 810教室

一三時二〇分開始

司馬遼太郎『韃靼疾風録』における日本人像

——華夷秩序と蛮性の表象を中心に

矢口 楓

本発表では、司馬遼太郎『韃靼疾風録』(一九八七年)における、日本人の表象を考察する。同作を含む司馬作品においては、「日本人」が様々な形で、時に構築的に描かれている。同作

の主人公庄助は、平戸に漂流してきたアビアを女真のもとに送り届けるという任務のため「韃靼」の地へ赴く。一七世紀初頭における明の衰退や女真諸集団の争いなどを背景とした対立から逃れるため、庄助は日本を代表する役人、アビアは庄助の妻という設定のもと生活を送る。その後も庄助はアイデンティティの揺らぎを感じつつ、複数の社会的地位を確立する。同作における庄助の「日本人」というアイデンティティは、庄助に内的焦点化した語りによってたびたび示される。またそうした「日本人」性は、庄助の髪型として表れている。他にも同作における髪型は、トインビーが唱えた華夷秩序の位置づけと重なるかたちで、各集団を表していることを明らかにする。

(青山学院大学大学院)

目取真俊「マーの見た空」論

——忘却の忘却を問う  
劉 榕シン

目取真俊「マーの見た空」(一九八五)は、沖縄のパン工場に出稼ぎにきた台湾の女性と地元の男性との間に生まれた「混血児」マーを中心に展開する作品である。従来の研究では、「混血児」としての境界的身体、性暴力をめぐる表象政治、いじめ表象といった観点から論じられてきた。しかし、物語内現在に呼び起こされる

「僕」のマーをめぐる記憶の断片や幻想が差し挟まれ、現在と過去、現実と幻想を往還しながら進行する本作の構成や、「僕」が村から姿を消したマーの存在の痕跡を辿る過程で、かつてマーからの性的暴行を受けた≡が果たす媒介的な役割については、十分に検討されてこなかった。本発表では、これらの点を踏まえ、「マーの見た空」におけるマーをめぐる忘却のあり様を考察することで、同時代における「混血

児」をめぐる記憶の選別の構造と、その結果として不可視化される忘却そのものを、本作がいかに問うているのかを明らかにする。

(早稲田大学大学院)

言葉の〈ヴァイブレーション〉、〈ヴァイブレーション〉の言葉  
——中上健次『日輪の翼』論  
李 在昶

本発表は、中上健次の『日輪の翼』を、作者固有の〈ヴァイブレーション〉という概念を手がかりに再読し、天皇(制)を扱う本作の方法論的特質を説明するものである。従来、本作はポストモダン的な移動という観点から論じられる傾向にあり、作中に遍在する揺らぎや振動のモチーフには十分な注意が払われてこなかった。そこで本発表では、登場人物の性質の揺らぎ・

車体の振動・言葉を触発する音に着目し、本作における主人公たちの移動が、単なるフラットな移動ではなく、立体的かつ重層的なものとして構成されていることを論じる。さらに、こうした揺らぎや振動が〈ヴァイブレーション〉概念と関連していることを示し、その移動が〈うっほ〉たる皇居の重力を露呈させると同時に、それを逆用する手法として機能していることを明らかにする。以上を通して、本作を天皇に統治される言葉からの離脱を志向する〈異貌の言葉〉を模索した実践として位置づけ直す。

(東京大学大学院)